

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 4 月 23 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01987

研究課題名(和文) カント批判哲学の体系性

研究課題名(英文) Systematic Unity of Kant's Critical Philosophy

研究代表者

中野 裕考 (Nakano, Hirotaka)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：40587474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：現在、アカデミックな哲学研究は専門分化が進み、哲学本来の特徴である全体的な視野を失った研究が多いと言われる。カントについての研究がすでに哲学研究の一専門分野になってしまっているが、そのカント研究の中でもその傾向は強く、理論哲学、実践哲学、美学、目的論と専門分野が分かれてしまっている。その傾向を多少なりとも改善すべく、本研究は、カント研究に定位しつつも哲学諸分野の全体的な連関を視野に収めた成果を生み出すことを目指した。その結果、真、善、美という基本的な価値相互の連関が「超感性的なもの」という重要概念を蝶番として辛うじて確保されようとしていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Nowadays academic studies of philosophy is divided into many specific fields, so that wide range perspective which is originally characteristic to philosophy is often underestimated. Kant studies itself forms already a specific area of philosophical study as a whole, and in this area investigators are concentrated into an even more specific aspect of Kant's philosophy, such as theoretical, practical, aesthetic, teleological philosophy. We intended to make this situation healthier through producing philosophical products with a global perspective, even through it is inevitable and desirable to settle our basement on Kant's critical philosophy. As a result, it revealed that in Kant's philosophy, systematic connection among such basic values as the truth, the good, the beauty is established on, so to speak, a hinge notion of "the super-sensible".

研究分野：哲学

キーワード：批判哲学 体系性 真理 善 美

1. 研究開始当初の背景

アカデミックな哲学研究は、現在では細分化された専門分野に分かれて行われている。各専門で競争力ある成果を生み出すためには必要なことではあるが、しかし同時にそれによって、哲学本来の包括的で全体的な視野を失ってしまいがちであるという弊害がある。カント研究自体がすでに一つの専門分野とみなされているが、そのカント研究においても、研究はたいてい、理論哲学、実践哲学、美学、目的論といった特殊領域に分かれて進行している。このこともやむを得ない面もあるが、しかしそれによってカント哲学の重要な体系的連関が見失われてしまうという大きな弊害が指摘されている。

2. 研究の目的

1. で挙げた哲学研究およびカント研究の現状を多少なりとも健全な方向へと引き戻すような研究成果を生み出すことを目指した。もっともカント批判哲学に定位することは、専門的な意義もある成果を出さなければならない以上不可欠であろう。そのうえで本研究は、カント批判哲学の体系的連関を見極めることを目指した。それによって、カント哲学に限定されない哲学全般という視点から見ても意義のある貢献を産出することを目指した。

3. 研究の方法

哲学研究全般への貢献を展望しつつ、カントの批判哲学にさしあたりの焦点を当てるところから開始した。理論哲学、実践哲学、美学・目的論を主なフィールドとする三人の研究者が連携し、それぞれの主要フィールドから出発しながらもそれ以外の領域にまで関わる問題を考察する。言い換えれば、カント批判哲学に含まれる諸分野、すなわち理論哲学、実践哲学、美学、目的論の複数の領域に関わる問題を論じるという仕方で、批判哲学全体の体系的連関を再構築することを目指した。

4. 研究成果

真、善、美、合目的性といった、人間にとって最も基本的な価値の間の体系的連関が、「超感性的なもの」という難解だが重要な概念を蝶番として確保されているということが明らかになった。以下に、研究組織を構成する中野裕考、山蔦真之、浜野喬士のそれぞれの視点から研究成果を記す。

一、中野裕考

中野は、カントが中世存在論の超越範疇の枠組みを踏襲することで哲学の体系性を確保していたことを明らかにした。「あらゆる存在者は一、真、善である」という形而上学的テーゼは、アリストテレスを受容しつつあった12世紀以降の存在論の主要テーマの一

つだった。このテーゼは、存在者が存在者である限りにおいて備えている根本的構造を言い表そうとしたものであり、トマス、スコトゥス、スアレスを経て、17世紀ドイツのアリストテレス主義を經由してカントに伝えられた。カントは『純粹理性批判』第十二節でこのテーゼに言及し、それを自らの視点から再評価している。これまでこのテキストはほとんど関心を集めてこなかったが、本研究によって、それが批判哲学全体の体系的連関の下敷きとされていたことが分かった。それによるとカントの批判哲学とは、存在者自体の根本構造として中世形而上学が述べようとしていた一、真、善を、対象について考察する認識主体の側の条件として捉えなおそうという試みだったことになる。これによってカントがいかなる意味で中世哲学の土壌に立脚し、いかなる意味で中世を離れた近代哲学の地平を開きつつあったかということが、従来よりも少し明らかになったと言える。

二、山蔦真之

山蔦は論文「崇高から美へ 『判断力批判』における善と美の問題」において、崇高と美の概念を手掛かりに、カント哲学における善と美の関係について考察した。カント哲学においてはしばしば、「崇高」の概念が、善と美をつなぐものであると理解されている。道徳法則と天空の星々を並置する『実践理性批判』末尾の有名な文章（「それらにより多く、より長く考えを及ぼせるほど、二つのものが新たに、いや増しに驚嘆と畏敬によってところを満たす。私の頭上にある星々の天空と、私の内にある道徳法則がそれである」）は、カントが自然美と道徳を共に崇高な対象として理解していたことを伺わせる。しかしながら、美を主題化した著作『判断力批判』においてカントは、崇高についてそれが善と美をつなぐ概念であるという主張を展開せず、むしろ崇高と対立する意味での狭義の「美」こそが、善の「象徴」とであるという議論を展開している。このことが何を意味するのかを山蔦論文は探求した。

探求の結果、明らかになったのは、カント哲学において「美は善の象徴である」という主張の根拠となっているのは「超感性的なもの」という概念であることであった。「超感性的なもの」の概念は、カント哲学のかなり後期において登場するにもかかわらず、批判哲学の体系性にとって決定的な意味を持っている。人間が自らの内に「超感性的なもの」を持っていることによって、人間にとって美は善を象徴している、そのようにカントは論じている。

すなわち、山蔦論文が「象徴」と「超感性的なもの」の概念を通じて探求したのは、崇高の感情とは違う通路での、美学と倫理学との接点であった。崇高とは対置される「美」の感情を抱く人は、それが常に快の感覚であ

るにもかかわらず、「象徴」という作用を通じて道徳的理念へと目を向けている。この事態を可能にしているのが「超感性的なもの」の概念なのである。というのもそれは、「趣味がそちらを仰ぎ見ているものであり、我々の上級認識諸能力すら、そこに向かって一致するもの」(KU, V 353)だからである。この「超感性的なもの」は、また、外的な「自然」と内的な「自由」の両方の「基体」であることによって、理論哲学と実践哲学との統一をも可能にする。こうしてカントは批判哲学の完成において、哲学の三領域の統一という課題にも一定の回答を与えたのであった。

「美」が「善」にとって単に補助的であるだけではなく、より深い地点において「善」と、そしてまた「真」とも一致するというカントの議論は、伝統的には「完全性」の下に包摂されていた哲学の三対象を、解体した上でさらに統合しようという試みにほかならない。この試みは後の世代において、「美という上位の原理」によって、哲学の諸領域を統一しようという思考へと展開される。しかしながらそのような統一はカントのものではなく、シラーやシェリングが目指したものである。美・芸術・詩をこころの活動の頂点に置き、そこに哲学の統一を賭けるこの思考は、視点を広げればショーペンハウアーやニーチェ、ハイデガーにまで及ぶだろう。さらには、ニーチェの薫陶を受けた現代哲学の一潮流が、一義的な「真」を脱構築し、あらゆるテキストを美的なものとして解釈しようとするときにも、そのような思考が前提されているように思われる。この潮流が今日、哲学内部の領域区分だけでなく、哲学と文学との領域区分をもあいまいにしたことはよく知られているだろう。カント哲学からすればこういった立場は、美に対する過剰な、おそらくは失望に終わる期待をかけている。美は確かに、人間が感性を超えた世界に触れていることを、別様に言えば、倫理的でありうる可能性を告げている。しかしだからと言って、美を感受するだけで人は善くなることはできないし、真に達することもできない。美を感受しつつもまた人は、道徳法則に従う努力をし、真の探求を続けなければならない。カント哲学においては、哲学の諸分野が何らかの形において統合されるとしても、しかしそれは一つの領野に他の領野が回収されるような仕方によってではなく、そのため、諸領域は依然として各々の独立性を保ち続ける。カントはこうして、真・善・美の、いわばゆるやかな統一を確保しつつも哲学の三領域の独立性を要求したのであり、その立場は数多くの批判にさらされながらも、今日に至るまで学としての哲学の領域区分と、そしてまた哲学の独立性を規定し続けているように思われる。以上のような結論によって、山蔦論文はカント哲学の体系性という問題に回答した。

三、浜野喬士

浜野は論文「カントにおける天才概念の体系的な位置づけ」において、諸々の学や技芸の諸領域およびそれら相互の関係の問題を、カントの用いる天才概念の変遷を通じ、探究した。

カントの天才概念の体系的な位置づけを問うことは、天才概念の適用範囲の動揺という問題と深く結びついている。ただこうした変化は『判断力批判』(一七九〇年)に限定して天才論を追いかぎり決して見えてこない。そのため本論文は、刊行著作や書簡に加えて、一連の覚書や講義録を重点的に検討した。

具体的に本論文は、次のような順序で問題を扱った。まず『判断力批判』内部において天才概念の四性質が列挙されている箇所を手がかりとした。すなわち第一に独創性、第二に範例性、第三に記述不可能性、第四に学ではなく技芸への規則の指定、の四つの性質である。本論文はこれらに関する『判断力批判』の記述を確認したうえで、レフレクシオンや講義録等における先行記述を調べ、その異同と、異同が生じた背景等について分析を加えた。

この四性質の分析を踏まえた上で、次に本論文は天才と哲学の問題を扱った。これは『純粹理性批判』成立史と密接に関係する問題枠組みの中に、天才論が位置していることを明らかにするものだった。

これらの分析を踏まえ、本論文は、天才と狂信という問題、さらに天才と調和という問題を考察した。こうした観点を踏まえることで、カントがいかなる意図で、天才を一定の制約のなかに置き、いわば批判的天才論を提示しようとしたのかを検討した。

以上のような考察を通じ明らかになったことは、次のことである。すなわちカントにおいて、天才は、学、端的には数学的諸学への適用を制限される。また哲学への適用をも限定的なものとなる。さらには美しい技芸の領域においても奔放な動きには制約が付される。伝統的、牧歌的な天才論から離脱し、また狂信へ至る天才論とも距離を取りつつ、いわば批判的天才論と言うべきものをカントは構築したわけである。

すなわち第一に、天才はもはや数学的領域では適用されない。新しい方法の発明においても、それを天才とは呼びえない(もっとも数学的諸学における才能から天才が区別されることは、否定的な評価を意味するわけではない)。第二に天才は、原型的知性のような、一切を直覚的に把握する能力になりえない。むしろ天才と哲学の分離が進むなかで、あるべき哲学者の理想が具体化していく。第三に天才は、美しい技芸の領域においても、単一の能力の突出ではなく、複数の能力の調和として規定され、しかも趣味との関係においては、訓練というかたちで従属的關係に入る。

このようにカントの天才論は、たんにいわゆる芸術論の一部として『判断力批判』の片隅に存在しているわけではなく、彼の思索の変遷のなかで当時の同時代的思潮と緊張関係に立ちながら、数学や哲学らとも接触し、それらの体系的な位置づけの再考を促すような機能を担ったわけであり、われわれが『判断力批判』で目にする天才論は、天才論を構成する諸概念の相克を経て、ともすればそちらに進んだかもしれない天才概念の可能性が限定され、諸能力および広義の諸学の権能の区分と割り当てが確定した後の彫琢された姿に他ならないことを本論文は示した。こうした天才論を通じた一連の議論は、カント哲学の体系性を考察するにあたり、独自の視座を提供するものでもあったわけである。

さらに論文「カント『判断力批判』初期影響史」についても、一瞥を与えておきたい。本論文は、一七九〇年に世に出された『判断力批判』が、刊行直後より、ゲーテやシラー、シェリングら、文学者、哲学者からの大きな反響を獲得し、後代に多大な影響を残してきたにもかかわらず、同書のミクロな初期受容史が、これまでの『判断力批判』研究において必ずしも明確化されてこなかった、という問題意識に立つものである。そこで本論文は、『判断力批判』刊行直後からその受容初期の期間に出された書評、入門書、事典、辞典等を分析し、同時代的著作としての『判断力批判』が、いかなる思想的な位置づけを占めるものとして理解されたのか、その一端を明らかにしようとした。そして同時代人にとって、『判断力批判』の何が新規なものとして映り、一方、何がわからずには理解し難かったのかを追い、そのことを通じ、同書の革新性を検討した。その際、メルクマールの一つとなったのが、本科研費のテーマでもある超感性的なものとその関連概念である。

具体的な検討対象を列挙すると以下のようになる。第一に初期書評群である。ここでは『ゴータ学術新聞』書評、『上部ドイツ一般文芸新聞』書評、『ゲッティンゲン学術新聞』におけるフェーダー書評、『一般文芸新聞』書評が検討された。

第二に、フィヒテの反応を見た。フィヒテは一七九四年六月七日カント宛書簡で（おそらくは回顧的な要素を含みつつ）次のように述べている。「わたしは特にあなたの『判断力批判』のうちに、わたし自身が哲学の実践的部門に関してもつ特別な確信と調和するものを発見しました」。フィヒテは、この書簡に先立つ一七九〇年九月から一七九一年にかけて、『判断力批判』に強い関心を抱き、その抜粋に取り組んでいた（一七九〇年晩夏のフリードリヒ・アウグスト・ヴァイスフーン宛フィヒテ書簡参照）。フィヒテはこのように強い関心を持っていた『判断力批判』について、ある種の綱要を作り、それを出版しようとしたことが、別の手紙から

は分かる（一七九〇年九月ヴァイスフーン宛フィヒテ書簡）。

第三に綱要と入門書である。『判断力批判』はその刊行直後から、直接的な影響下で執筆されたミヒャエリスらの著作等（『判断力批判』のいわば美学化の嚆矢）と並んで、複数の綱要や入門書が相次いで出版された。本論文では、スネル、ベック、キーゼヴェッターの著作について扱った（スネル『カント美感的判断力批判の叙述と解説』（一七九一年および一七九二年、ヤーコプ・ジギスムント・ベック『綱要』第二巻、一七九四年、キーゼヴェッター『門外漢のためのやさしく書かれたイマヌエル・カント「判断力批判」』、一八〇四年）。

第四に、カント批判哲学のレキシコン化という文脈における、同時代の各種事典、辞典である。『判断力批判』刊行前後から、1800年前後にかけての十数年は、カントの批判哲学に登場する諸概念が、明確に術語として意識され、レキシコンとして纏め上げられていく時期である。本論文はメリン、シュミート、ロシウスらが独自に編纂した批判哲学用語辞典の内容を、『判断力批判』関連概念に重点をおいて確認した。

さて、こうした作業の結果、以下のことが明らかとなった。『判断力批判』の革新性の両輪を形成している、「超感性的なもの」（「超感性的基体」）および「認識一般」であるが、その同時代における取り扱いにはかなりの差異がある、ということである。なかでも注目すべきは、「超感性的なもの」がすでに術語として、一部の論者には一定程度の注目を集めている、ということである。

またカント批判哲学の体系性に関わる問題についても、すでに同時代において注目が寄せられていることも目を引く。たとえば、『判断力批判』をもって「全批判的業務を終える」とする序文の有名な文言が、実際には何を意味するのか、という点については、当時から関心が寄せられている。また趣味の方法論が存在しないのは、趣味の批判が「批判」であり「学」ではないがゆえであるが、こうした『判断力批判』の根本性格に関わる論点についても、すでに同時代において言及がある。さらに、批判哲学の体系的構成という点において、『判断力批判』の序論が持つ突出した重要性についても、ごく早い時期から意識されていた。

本論文はこうしたカント哲学の体系性に関わる問題について、一次資料に基づき、一定の解明を果たしたものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

中野裕考「超越範疇「一」「真」「善」を手引きに批判哲学の体系的連関を解釈する試み」『現代カント研究』14
山蔦真之「崇高から美へ」『判断力批判』における善と美の問題」『現代カント研究』14
浜野喬士「カントにおける天才概念の体系的位置づけ」『現代カント研究』14

(3)研究分担者 山蔦 真之
(YAMATSUTA, Saneyuki)
名古屋商科大学・コミュニケーション学部・講師
研究者番号：50749778

〔学会発表〕(計 1件)

浜野喬士「カントにおける天才概念の体系的位置づけ」、カント研究会第311回例会、法政大学、2017年8月27日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

翻訳
ジョルジオ・トネリ(浜野喬士訳)「『判断力批判』テキストの生成(後篇)」『フィロソフィア』第103号、早稲田大学哲学会、2016年3月、pp.73-94.

6. 研究組織

(1)研究代表者 中野 裕考
(NAKANO, Hirotaka)
お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授
研究者番号：40587474

(2)研究分担者 浜野 喬士
(HAMANO, Takashi)
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：20608434